年間第２３主日

福音朗読　ルカ 14・25-33

2022.9.4

カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今月の１８日に大司教様をお迎えしてこの教会で行われる堅信式が行われます。今日と来週の日曜日、堅信を受ける方がたの準備の会があります。ミサに出ていただいて、簡単な勉強やゆるしの秘跡をします。

大人になってから洗礼を受ける人は大体は同時に堅信式を行う。だけど、それだと堅信を受けたかどうかも忘れちゃうから、多くの場合では別々にして、大司教様から、堅信式を特別なものとしてする場合も多いですけど、子供の頃に、赤ちゃんの頃とか小さい子供の頃に洗礼を受けた人っていうのは、その成長の段階に応じて洗礼、初聖体、堅信と、段階を追って秘跡を受けていく。そして堅信の秘跡で完全なキリスト信者というか教会の一員になる。そういう段階を踏むようにプログラムされているというか、なっているわけです。

子供の頃に親とか保護者の望みによって子供たちが洗礼を受けるというのは、お父さん、お母さん、あるいはその洗礼を望む大人が、洗礼を受ける子供の人生を自分たちが一から十まで全部を助けることはできない、そういうある意味での現実の認識ですね。自分たちができることは一所懸命するけども、でも一人の人生の全部を助けることはできない。だから、あとは神様に任せる。そういう意味を含んでいるんじゃないかなと思います。いろんな出会いを通して、あるいは直接心に語りかけることを通して、その人が生きて行くことができるように神様に任せるということです。つまりは、自分自身が親であっても、一人の子供、一人の人生に対して絶対的な存在ではありえない。そういうある意味では現実の認識だし、それを神様に任せるという、神様の前での謙遜な表れですね。それを、裏を返せば、今日のイエス様が言っている「誰でも父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」（ルカ 14・26）という、「憎む」というのは「忌み嫌う」っていう意味ではないという説明は、この言葉が出てくるたびにたぶんされると思いますけども、「それを絶対的なものとしない」ということです。つまりは、どんな良いものであってもやっぱり限界はあって、それに絶対的に頼ることはできないし、同時に自分が相手に対して絶対的な存在ではありえないのだという認識を持つということなんじゃないかなあと思います。

一方で、中には、子供に洗礼を授ける、あるいは子供が信仰を持ち続けるということが、いつまでも自分の影響下に留まっていることのしるしかのように考える場合があります。そういうときに、やっぱり子供たちは反発します。だから、そういう意味で洗礼を授けているわけじゃないっていうことをもう一回思い出さなきゃいけないんです。反発して、神の存在とか疑問を呈してくることがある。そうなったら「神父さんに聞きなさい」って言うのは、やっぱり正しい態度じゃないわけです。子供たちは、信仰の理論について見ず知らずの人から教えてもらいたいから疑問を呈しているわけじゃない。何のためにわたしに洗礼を授けたのかと、そして、それはどれほどあなたにとって大切なのか、っていうのを大人に対して問うてきているわけです。だから、それは自分の拙い、完全に分からない言葉であっても、一所懸命語ろうとする姿が、そのときには納得はさせられないと思うけども、どういう覚悟で子供たちに洗礼を授けたかということが伝わらなきゃいけない。

あるいは、「あなたがもし信仰を捨てると言うならば、それを受け入れる。一人の人間の自由というものを大切にしなきゃいけないっていうのが、信仰を通して神様から受けてることだから」って、最終的には言って良いわけなんですよ。その時になって初めて、自分にとって信仰ってなんなのかということを、もしかしたら子供たちは考え始めるかもしれません。そうじゃなくて「とにかく教会に行きなさい。うちは先祖代々カトリックなんだから」みたいな話だけをしてるならば、それはいつまでも親の支配下に留まれっていう意味で子供たちは聞いてしまう、というようなことかもしれません。

だから、みんな神様の前に完全じゃないし、そして委ねながら生きて行くっていう、そういう意味で、将来いろんなことを通して助けてくださるように、そんな思いで神様に委ねたんだということを、思い起こさなければなりません。今日は、堅信を受ける人というよりは幼児洗礼というか、他の人に洗礼を望む人々に向けて話しているようになりましたけれど。わたしも幼児洗礼です。子供の頃に、たとえばゆるしの秘跡って子供の頃もありますよね。告解ってその当時は言ってました。告解、ゆるしの秘跡の中でいろんな罪を告白するでしょう。どんなことを言うのかっていうのを、うちは母が信者だったから洗礼を受けたんですけど、母に聞いたことがあります、ちっちゃい子供の頃、小学生の頃、初聖体の前とか。そしたら、母は子供たちを怒り過ぎちゃうこととか、そういうことを神様に告白するんだ、と。「あ、そうなんだ、親であってもやっぱり神様の前に謝らなければならないことがあるし、怒り過ぎちゃってるって自分で分かってるんだ」みたいなこと。そういうことも神様の前に反省して、親であっても同じ神様の前に子供同士として不完全なんだということを学んだというのかな、子供ながらに分かる、感じるというような経験、それが信仰教育の中では

一番良かった教育かなと思います。どこかで神父さんの話が良かったこととか、色々話してくれたこともありますけども、そういうことよりは、それぞれ大人であっても神様の前には不完全なんだという、信仰における謙虚さを学んだような気がいたします。だから、教会学校なんかでも、ゆるしの秘跡とかそういうときに、できればリーダーたちから先にしてほしいって、いつもどこの教会に行っても、子供たちに内容は言いませんよ、だけどその姿が信仰教育になるんじゃないのかなって思いながらやってるわけです。

今日、もう一つは、被造物を大切にする世界祈願日、フランシスコ教皇様のご意向によって。それも同じですよ。この祈願日は、神様の前に、わたしたちはこの世界の主人じゃないんだ、神様からお預かりしている、あるいは、お借りしている、そしてお互い同士それを大切にし、神様への感謝をもって被造物も大切にするっていう、ある意味で神の前での謙虚さによっていろんな環境のことを思うっていうことです。だから、わたしたちがいろんなことを通して、自分というものは不完全である。だけど、わたしたちをお創りになった神様に導かれて、そしてお互い同士助けられながら歩んでるんだ、ということを思い起こすということの中に、本当の意味での、神様に開かれて、聖霊の導きを見ながら歩んで行くことができればなあ、と思います。

そんなわけで、今日から堅信の準備を始められる方々と共に、わたしたちも新たな思いで神様の前に謙虚な心をもって、お互いのために祈り合いながら、特に堅信の準備をされる方のために祈りながら、この２週間、１８日の堅信式までの間、過ごしたいと思います。